

Title	平成17年度意匠学会賞および意匠学会論文賞
Author(s)	並木, 誠士
Citation	デザイン理論. 47 P.1-P.1
Issue Date	2005-11-12
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/52745">http://hdl.handle.net/11094/52745</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 平成17年度 意匠学会賞および意匠学会論文賞

学会賞選考委員会

委員長 並木誠士

### 学会賞

該当者なし

### 論文賞

1. 神野由紀「近代日本における商品デザインの展開 ― 明治から昭和初期の子供用商品を例に」(『デザイン理論』46号所収)

〈推薦理由〉

本論文は、明治時代末から昭和時代初期までに百貨店を中心に繰り広げられた子供用商品に焦点を当てて、具体的な事例を分析しながら、商品デザインという概念の成立と展開を論じたものである。近代的な子供観の成立と子供用商品の影響関係という視点についての研究はすでに欧米でも見られるが、本論文は、近代日本を対象とした同主題の研究として、基礎的な位置を占める。また、百貨店という、近代の消費経済を象徴する場をデザインの問題として顕在化させている点でも評価できる。本論文を基礎として、今後、近代日本におけるデザイン概念形成についての研究が進展することが期待できる。

2. 島田有紀「江戸時代の画論にみる狩野元信の評価」(『デザイン理論』46号所収)

〈推薦理由〉

本論文は、狩野派の基盤を築いたことで知られる狩野元信が、江戸時代においてどのように捉えられていたのかを、画論を読み解くことにより分析したものである。作家論、様式論は、美術史学研究のなかで現在でも重要な位置を占めてはいるが、同時に、画家が社会のなかでのどのように受け入れられたかという受容史の研究も必要になっている。本論文は、そのような観点から論述されたもので、とくに評価という概念を前面に出したことにより、デザイン史研究にとっても、ひとつの視座を提供している。画家の受容は、かならずしも画論レベルだけで論じられるものではないので、今後は、より広範な受容の様相を浮かび上がらせてくれることを期待したい。